

温故知新

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2009.7 Vol.14

平成21年7月発行
 発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
 〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
 TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125
<http://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

『法隆寺の至寶：昭和資財帳』と法隆寺

■図書館散歩

「学問のことば」と
「日常のことば」

文化政策学部 文化政策学科 教授
 教務部長
 佐々木 崇暉

どちらかと言えば
本の虫

デザイン学部 空間造形学科 教授
 大学院 デザイン研究科 教授
 古瀬 敏

■(シリーズ)

図書館・情報センターを使いこなそう!

論文検索～
国立情報学研究所
「CiNii(サイニイ)」編

■巻末

本学教員著書コーナーを
新設しました

図書館・情報センターの
蔵書数および利用状況



『法隆寺の至寶：昭和資財帳』と法隆寺

法隆寺は、飛鳥時代にわが国最初の本格伽藍として作られた飛鳥寺に続く聖徳太子の私寺であった。法隆寺が建てられた七世紀前半の飛鳥時代には、五十ほどの寺院が建立されたようであるが、現在にまで健在なものは一つもない。この[創建]法隆寺は天智九年(670)に焼失し、白鳳時代に再建されたが、それから現在に至るまでおよそ千三百年間、[再建]法隆寺は無事に歴史を乗り切り、世界最古の木造建築となっている。

法隆寺は、天武九年(680)に定められた百濟大寺や川原寺のような天皇勅願の国家官寺に対して、再建中に太子発願の寺院から太子信仰の寺へと変化し、それにより太子の文化遺産の再興を計画した。こうして、太子関係の文物たる飛鳥時代の仏教美術品が[再建]法隆寺に集中することになったのである。飛鳥時代の[創建]法隆寺が天智九年に焼失したにもかかわらず、白鳳時代に造られた[再建]法隆寺、つまり今の法隆寺に飛鳥時代の仏教美術品が多く伝わるのはそのためである。同時に白鳳時代に作られた寺院で今も残るのはこの[再建]法隆寺だけであるから、法隆寺という寺が如何に貴重で稀有な存在であるかがわかる。従って、法隆寺には古代の飛鳥時代から中世を経て、近世に至る各時代の美術品が満遍なく現存している。これは数あるわが国寺院の中で唯一法隆寺だけに見られる現象で、他の寺院ではほとんど見られない。これらを千三百年間に亘り守り続けてきた各時代の日本人の大きな情熱の源泉こそ、聖徳太子信仰を描いて他にはない。

このような多くの文化財を後世に伝えるため、昭和五十六年(1981)から十余年の総合的な調査を行い、その台帳でもある『法隆寺昭和資財帳』を作成したものである。

【参照文献】

- *法隆寺昭和資財帳編集委員会『法隆寺の至寶：昭和資財帳』全15巻 小学館、1985-92. [702.17/H 89]
- *村田治郎『法隆寺の研究史』中央公論美術出版、1987. [521.81/Mu 59]
- *大橋一章『法隆寺 葬師寺 東大寺 論争の歩み』グラフ社、2006. [702.17/O 28]



文化政策学部 文化政策学科 教授
教務部長

佐々木 崇暉
Sasaki Shuki

本文中に登場した資料

- アダム・スミス著：水田洋、杉山忠平訳
『国富論』
 081/Iw 2/164-167
- マルクス [著]；エンゲルス編；向坂逸郎訳
『資本論』
 081/Iw 2/204-212
- アルフレッド・マーシャル著；馬場啓之助訳
『経済学原理』
 331.74/Ma 52/1-4
- ショムベーター著；塩野谷祐一、
 中山伊知郎、東畑精一訳
『経済発展の理論：企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究』
 081/Iw 21/147-1-2
- ケインズ著；塩野谷祐一訳
『雇用・利子および貨幣の一般理論』
 331.74/Ke 671/ 7
- ミルトン・フリードマン著；
 熊谷尚夫、西山千明、白井孝昌共訳
『資本主義と自由』
 332.06/F 47
- 内田義彦著
『社会認識の歩み』
 081/I 95/798
- 内田義彦著
『学問への散策』
 002/U 14
- 内田義彦著
『作品としての社会科学』
 304/U 14/1
- 内田義彦著
『内田義彦著作集』
 330.8/U 14/1-10

「学問のことば」と「日常のことば」

私は、一回目の授業で受講生に対して「経済学に対してどんなイメージをもっているか」を質問することにしている。学生からは必ず、次のような回答が返ってくる。「とても身近なことだけど、とても遠くに感じるもの」「身近だけれど理解できないもの」。つまり、学生は「経済は身近だが、経済学は遠い存在である」と感じており、自分の日常生活とは何ら関わりのない知識とみなしている。経済学という学問が学生一人一人を自由にしたり、豊にしたり、友達とのコミュニケーションを楽しむ手段になるとは思っていない。

経済学は科学性や厳密性を求める、学問として完成された体系を作り上げてきた。あまりにも科学性を求めたために、私達の日常的な感覚から遊離してしまったくらいがある。人々の生活世界と経済学が対象にしている科学的世界が遊離している。経済学で使われる「限界消費性向」とか「相対的剩余価値」とか、およそ私たちの日常語にはなく、親しみの湧く言葉ではない。しかし、どの学問においても「概念」conceptを学ばなければならぬという事情がある。私たちの肉眼（日常語）は、ある意味で鋭さを持っているが、先入観、偏見、利害が入り込んでおり、曇っている場合もある。従って、対象（経済現象）と肉眼の間にメガネ（学問語・経済学の言葉）を挿入してみると、対象がすっきり見える場合がある。私は「AINシュタインの眼」というテレビ番組をよく見る。この番組は日常で起きている様々な現象を、特殊カメラを使って肉眼では見えない世界を映し出し、その原因を突き止めようとしている番組である。ハイスピードカメラで写し出した映像は自然時間とは異なるが、事柄の本質をはっきり見せてくれる。学問語というメガネは、丁度この特殊カメラにあたるのではないか。

このメガネを私達凡人ではなかなかつくることができない。そこで先人の学問的遺産であるメガネを学ぶ。経済学にも『国富論』（アダム・スミス）、『資本論』（マルクス）、『経済学原理』（マーシャル）、『経済発展の理論』（ショムベーター）、『一般理論』（ケインズ）、『資本主義と自由』（フリードマン）といった古典といわれる書物がたくさんある。しかし、これらの本で知った概念は、そのままでは自分のものにならないし、自分にとって生きた概念にはならない。学問語を一度、「日常のことば」に置き換える作業が必要である。概念とはあくまでも、ある特定の視点から、ある特定の場面を複雑な現実から切り取っているにすぎない。例えば、経済学では経済の大きさを表す概念としてGDPを使う。この概念からみた日本経済は世界第二位の経済大国になる。しかし、私たちの生活実感に依拠すると、必ずしも世界第二位の経済的豊かさを実感できない。物価が高く、生活のための経費がかかるため、ゆとりある生活を享受しているとはいえない。この概念は、1年間に新たに生み出された付加価値を集計し、市場で売り買いされたものだけを集計している。そのため、過去にストックされた富や市場で商品化されないサービスは除外される。また、経済活動によって自然環境を破壊していくても、売り上げを伸ばし利益を上げていけばGDPは増えしていく。したがって、学問語が生活世界のなかで生き生きとした概念になるためには、日常的な経験を「学問のことば」につなぎ、逆に「学問のことば」を日常的な経験に即して自分のものにしていくという往復作業が必要になる。

大学における教育は研究に基づいた教育であることは言うまでもない。しかし、その研究は、ますます専門分化され、細分化され、高度化され、結局一部の専門家しか近づけないものになっている。逆に、素人（学生）が近づけない科学や学問になることによって、人々を「管理する学問」になったり、「その学問の市場価値を高める手段」になったりしている。科学や学問を「素人の口を封じる手段」にさせないためにも、私たち大学教員は学生をたんに科学や学問の受け手として見るのでなく、科学や学問を身につける市民（学問をする市民）として捉え直すことが必要である。学問をする市民（学生）を育むためには、日常的な経験を学問の言葉に翻訳し、かつ、学問の言葉を自然言語や日常語に置き換える工夫こそが、我々に課せられている使命である。最後に、経済学史家・内田義彦の次のことを記し、筆を置くことにしよう。「学問も芸術も、学者と芸術家と市民（学生）との双方向的な創造物であって、それを両方が創造しながら作り上げていくのが、古典の批判的継承である」（内田義彦著『学問への散策』岩波書店、1974）。



デザイン学部 空間造形学科 教授
大学院 デザイン研究科 教授

古瀬 敏
Kose Satoshi

本文中に登場した資料

ジェームズ・D・ワトソン著、
中村桂子・江上不二夫訳

『二重らせん』
464.27/W 47

ジェームズ・D・ワトソン、
アンドリュー・ベリー著；青木薰訳
『二重らせんの発見から
ヒトゲノム計画まで [DNA ; 上]』
408/B 59 /1472

ジェームズ・D・ワトソン、
アンドリュー・ベリー著；青木薰訳
『ゲノム解読から遺伝病、
人類の進化まで [DNA ; 下]』
408/B 59 /1473

レイチェル・カーソン著；青樹築一訳
『沈黙の春』
519.79/C 22

宇井純著
『公害原論』
519/U 56

ドネラ・H・メドウズ〔ほか〕著；
大来佐武郎監訳
『成長の限界：ローマ・クラブ
「人類の危機」レポート』
304/M 11

柴田博〔ほか〕著
『間違いだらけの老人像：
俗説とその科学』
491.35/Sh 18

バット・ムーア著；木村治美訳
『変装：A true story :
私は三年間老人だった』
936/Mo 39

永井明著
『ぼくに「老後」がくる前に：
老人体験レポート』
367.7/N 14

どちらかと言えば本の虫

どちらかと言えば私も本の虫に属するだろう。小学生のころ、夕方になって薄暗くなってしまったそのまま本を読み続けたから近視になった、と言われた（母親も強度の近視だったので遺伝の可能性が高い）。しかし、濫読のせいか、あまり本の中身を記憶していない。最近は、一つか二つ、新しい知見やインスピレーションを得られればそれでいいのだ、と思うようにしている。

高校での担任で生物の先生だった春田俊郎さんが興奮したように教えてくれたことの一つがDNAだった。今は克明に記録した本もいくつか出ている（『二重らせん』、『DNA』）※が、当時はまだ教科書に書かれていなかったと思う。そのDNAなどの話はかなり魅力的だったが、残念ながら大学で教わる物理と化学に歯が立たないとあきらめて、進路選択では生化学の分野に進むことはなかった。

高校の時に強い印象を受けたもう一冊の生物に関わる本は『生と死の妙薬』という。翻訳者は青樹築一となっているが、かなり高名な学者のペンネームだそうだ。この本はその後、著者のレイチェル・カーソンがつけたもとのタイトルである『沈黙の春』に戻して、新潮社より刊行され続けている。われわれ人間が科学技術によって環境に与える影響の大きさに関して、農薬の害を訴えて警鐘を鳴らした古典と言われ、記述は現在の知見に照らして必ずしも正しくないところもあるという指摘もあるが、洞察の的確さは依然としてゆるぎがない。

大学紛争の嵐がようやく収まって建築学科に進学、その後修士を1年で中退して建築研究所に就職してしばらくは、都市工学科助手の宇井純さんが開いていた「公害原論」の講座にかなり通った。現場と当事者とを重視したこうした場に関わったことは、つくる側ではなく使う側に立つものを考えようという私の研究スタンスに影響を与えたと言えるだろう。

就職してしばらくは建築と空気汚染に関する研究をしていたが、ちょうどそのころに出版された本が『成長の限界』。著者のデニス・メドウズ博士は今年の日本国際賞を受賞したが、その年齢（生年1942年）を見てなんと若いときの成果だろうとショックを受けた。この本が予測したように資源枯渋はまだ起こっていないが、中国がもう少し豊かになってみんなが自家用車を持つようになったらと想像すれば、単にデッドラインが引き延ばされているだけに過ぎないと愕然とする。

さて、ひょんなことから科学技術庁に2年間出向したら、研究所に戻る際に大もめにもめ、結果として研究分野を建築の安全と使い勝手に変えることになった。現代でも通じるキーワードで言えば、シックハウス（当時はシックビルディング）の専門家となるはずだったのが、ユニバーサルデザインの専門家になることになった。専門分野を無理矢理に変更されないでいたら、シックハウスの問題は芽のうちに摘み取っていたはずだが、果たして日本のためににはどちらの解決が優先されるべきだったか、わからない。

最初は住宅での日常災害事故が研究の対象だったが、そのうちに、高齢期に意図に反して追い出されることなく安心して住み続けられる住宅を自分たち団塊世代のために用意するにはどうすればいいか、という課題が研究者人生を送る中心テーマになった。その方向を議論するときによりどころになったのが、『間違いだらけの老人像』という本。マスメディアなどでこれが高齢者だと繰り返し告げられる「弱々しい」イメージは誤りだ、と明解な説明をしていた。その後著者の一人である柴田さんといっしょに本を書くことになって、そのときには「あの本は今では古い部分もある」と言われたけれど、それでも俗説を打ち破るのに大きな力添えになった。少なくとも、高齢者専用住宅がごく限られた人のためだけの特殊解であって、団塊世代そしてそれ以降の高齢者には事実上意味をなさない概念だということは、この本によってはっきりした。

高齢者についての考え方でもう一つ大きなインパクトがあったのは、パトリシア・ムーアの『変装：私は三年間老人だった』だ。高齢者を社会的弱者におとしめる人々の見方と行動を、身をもって経験したことを記録したこの本は、社会の持つ問題点をみごとにえぐり出した。2005年に復刊されたときにちょうど彼女が来日したので、知人たちと東京でこぢんまりした会合を設定したが、彼女の指摘した点、エイジズムという偏見は現在に至るまでまだ解決されていないなというのが私の現状認識である。なお、その本をまねて日本で同じように変装して加齢後を経験した体験記がある（『ぼくに「老後」がくる前に』）。

（注）福岡伸一『生物と無生物の間』（講談社現代新書）には、ワトソンとクリックが“Nature”に投稿した論文全文が縮小して掲載されている。2ページにわたっているが、分量としては1ページちょっとしかない。非常に冗長な論文を読んで読まざるを得ないが、この凝縮された考察がノーベル賞につながったことに思いをはせる。

〈シリーズ〉 図書館・情報センターを使いこなそう！

論文検索～国立情報学研究所「CiNii（サイニイ）」編

国立情報学研究所のデータベース「CiNii（サイニイ）」は、日本の学術論文を中心とした論文情報の提供サービスです。国内の学協会が発行する学協会刊行物に掲載された論文と、国内の大学等が刊行する研究紀要、国立国会図書館の雑誌記事索引データベースなどを含む膨大なデータから目的の論文にナビゲートします。収録数は、約1,225万件(2009年5月30日現在)にのぼります。

2009年4月1日に、ユーザビリティの向上やシステム連携の容易化、サービスの安定提供を目的にサイトがリニューアルされ、より使いやすくなりました。

CiNiiの特徴

- 膨大な論文情報の中から簡単に目的の論文を探し出せる
- 学協会が発行する学協会刊行物や大学等で刊行する研究紀要の論文本文を閲覧できる
- 連携協力している他サービスの論文本文等へナビゲートするリンク機能がある

【CiNiiへアクセスするには】

① 図書館・情報センターのトップページ「電子情報サービス」から、「CiNii（論文検索）」をクリック



② CiNiiトップページ (<http://ci.nii.ac.jp/>)



キーワードを入力して検索します。登録された論文情報のうち「論文名」、「著者名」、「著者所属」、「刊行物名」、「ISSN」、「巻」、「号」、「ページ」、「出版者」、「抄録」、「論文キーワード」が検索対象となります。条件を絞り込んで検索するときには「詳細検索」から検索します（②-1 参照）。

②-1 詳細検索



詳細検索では、「論文名」、「著者名」、「刊行物名」、「論文キーワード」など、検索対象とする項目を細かく指定した検索ができます。また、複数の検索条件の関係（論理演算）を用いた検索もできます。

☆検索テクニックをマスターしよう！

AND検索 複数入力したすべてのキーワードを含むレコードを検索する。空白文字（半角・全角空白）、または「△&△」（△は空白文字、以下同じ）で区切り検索する。
例：「温暖化 森林」、「温暖化 & 森林」

OR検索 複数入力したすべてのキーワードのいずれかを含むレコードを検索する。「△OR△」（ORは半角・大文字）、または、「△|△」で区切り検索する。
例：「温暖化 OR 森林」、「温暖化 | 森林」

NOT検索 複数入力したキーワードで、直後のキーワードを含まないレコードを検索する。「△NOT△」（NOTは半角・大文字）、または検索後の直前に「△-」（半角ハイフン）を付ける。
例：「温暖化 NOT 森林」、「温暖化 -森林」

〈シリーズ〉 図書館・情報センターを使いこなそう！

③ 論文検索結果一覧画面

The screenshot shows the CiNii search results page for '静岡文化芸術大学'. The search bar at the top contains the query '静岡文化芸術大学'. Below the search bar, there are several search filters and a search button. The main area displays a list of search results, each with a title, author(s), and a PDF download link. The first result is highlighted with a red circle. The right side of the screen shows a sidebar with a list of authors.

- 1 連続と断続：二十世紀初期中国の歴史教科書における黄帝叙述
- 2 フジタ・ゴビーティン&メティアート/音楽情報科学(ソラウエーティアート)
- 3 善鏡イタピー：国民との相互理解が求められる新し時代の行政広報—静岡文化芸術大学副学長/上野豊津(特集:生活者の関係が深化するパラグラフドクトーラー)
- 4 着目処理:カセッタを活用したメディアアートのための汎用インターフェースシステム・インクフェース(2)

④ 詳細表示画面

This screenshot shows the detailed view of a specific search result from the CiNii database. The result is titled '連続と断続：二十世紀初期中国の歴史教科書における黄帝叙述' by Sun Xiang. The page includes the author's name, affiliation, and a brief abstract in Chinese. It also features a preview of the document and links to full-text PDFs and other resources. A red circle highlights the 'PDF' link next to the document title.

《機関名や刊行物名の一覧から探すとき》

トップページにある「CiNii本文収録刊行物ディレクトリ」をクリックします。

This screenshot shows the 'CiNii 本文収録刊行物ディレクトリ' (CiNii Recorded Publications Directory) page. It lists various categories of publications, such as 'CiNii 本文収録刊行物' and 'NII-ELS 収録刊行物'. Below these are links to 'すべての学術刊行物', '刊行物名から探す', and a large grid of letters (A-Z) for navigating through the publications. A red circle highlights the '刊行物名から探す' link.

このように、CiNiiは論文の検索に非常に便利なデータベースです。レポートや論文作成等に活用してください。

ここではキーワードを「静岡文化芸術大学」として検索してみます。

各検索結果には「タイトル」、「著者名」、「スニペット(抄録がある論文のみ)」、「刊行物名」、「巻」、「号」、「参考文献(数)」、「被引用件(数)」が表示されます。

「タイトル」をクリックすると、詳細表示画面にジャンプします。

検索結果一覧に含まれる著者名と刊行物名が右側に表示されます。

CiNiiに論文本文がある場合(収録件数約1,225万件のうち約320万件)は、「本文を読む」のところにリンクボタンが表示されます。

このボタンをクリックすると本文が表示されます。

ただし、ボタンがあっても著作権等により本文を読むことができない場合もあります。

この検索方法を用いると、NII-ELS(学協会刊行物と研究紀要)の論文に対して、その刊行物を刊行している学協会や機関名、刊行物名から、巻号一覧、目次一覧…と、順を追ってたどることができます。

◎本学教員著書コーナーを新設しました

図書館カウンター前に、本学教員著書コーナーを新設しました。ここには、初代学長予定者の高坂正堯（こうさか まさたか）先生、木村尚三郎初代学長、川勝平太前学長および本学の現職教員の方々の著書を集中的に配置しています。ぜひご利用ください。

【形状・配架等】

- ・図書の背の下方に、青地に「教」のラベルを貼付
- ・大型本は隣接する棚に配架
- ・全集の1冊の場合は台本版を設置（本体は請求記号のところに配架）
- ・雑誌論文はこの場に配架されていません

【貸出】

通常の貸出条件・貸出手続と同じです。

【返却】

返却処理後、教員著書コーナーに返却してください。

※木村初代学長の著書は多数あるため、単著・共書・訳書等を教員著書コーナーに集め、部分的に執筆されたものについては、目録を台紙に貼付して提供しています。それぞれ請求記号（ラベル番号）の場所に配架していますので、ご利用ください。

※以前この場所に配架していた図書のうち、『放送大学テキスト』は、それぞれの請求記号のところに配架しました。

『新スーパー過去問ゼミ』『業界の最新常識』『なるにはBOOKS』は、北側の棚へ移動しました。

※配架場所がわからない場合は、図書館カウンターでお尋ねください。



◎図書館・情報センターの蔵書数および利用状況

項目 \ 年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度	H20年度
蔵書冊数(冊)	116,251	126,038	139,995	151,574	160,912	171,076	179,896	193,234	196,759
うち和書	100,382	108,415	120,106	129,914	137,239	145,783	153,011	164,487	167,381
うち洋書	13,360	14,027	15,743	17,091	18,730	20,085	21,349	22,888	23,194
うち視聴覚	3,195	3,596	4,146	4,569	4,943	5,208	5,536	5,859	6,184
所蔵雑誌タイトル数(種)	1,931	2,640	2,800	2,855	2,980	3,064	3,130	3,207	3,279
うち和雑誌	1,684	2,292	2,420	2,466	2,587	2,645	2,698	2,765	2,821
うち洋雑誌	247	348	380	389	393	419	432	442	458
年間受入冊数(冊)	91,349	9,101	14,101	11,579	9,350	10,164	8,820	13,338	7,475
うち和書	78,978	8,033	11,855	9,808	7,142	8,544	7,228	11,476	6,364
うち洋書	11,487	667	1,724	1,348	1,800	1,355	1,264	1,539	718
うち視聴覚	884	401	522	423	408	265	328	323	393
平均入館者数(人)	51,804	89,424	111,230	137,545	133,733	126,125	118,073	112,885	120,362
うち学生	44,542	77,304	100,395	125,698	120,896	115,283	107,466	102,376	108,620
うち教職員	3,631	4,656	5,395	5,538	6,568	5,806	5,882	6,269	6,579
うち学外者	3,631	7,464	5,440	6,312	6,269	4,982	4,725	4,240	5,163
1日平均入館者	224	322	402	486	466	440	425	400	417
館外貸出冊数(冊)	7,119	14,880	28,896	34,399	33,789	35,496	32,593	31,663	30,863
うち学生	4,174	12,814	21,644	28,001	26,862	27,791	25,755	24,559	24,001
うち教職員	2,945	1,534	5,193	4,001	4,337	5,215	4,935	4,910	4,128
うち学外者	0	532	2,059	2,397	2,590	2,490	1,903	2,194	2,734
学生1人当たり貸出平均	11	18	21	20	18	18	17	16	16
学外登録者数(人)	693	785	625	996	827	812	677	667	688
開館日数(日)	231	278	277	283	287	287	278	277	289